

本日は山上でイエス様の御姿が変わった箇所。この出来事から主にある希望を見てまいりましょう。

I. 御国到来の恵み（1）

「まことに、あなたがたに言います。」イエス様がこれから大切な事を語る時に使われる言葉。1節の意味はイエス様のよみがえり、死者の中から復活し、死の力を覆すということが「神の国が力をもって到来している」に繋がる。イエス様は「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです」（ヨハネ 11:25）と約束された。つまり主を信じる者は誰でもイエス様がよみがえられたように神の国（救いの恵み）が訪れ、永遠の滅びの死を味わわないという事。

II. 静かな場所で神と出会う（2）

「それから六日目」とは、前回の8章後半の出来事から。前回、ペテロや弟子達にとって衝撃を受けた事は救い主であるはずのイエス様がこれから苦しめられて殺されると知らされた事。弟子達はイエス様のその言葉を受け止めきれないまま六日間を過ごしていたはず。そのように落ち込む弟子達にイエス様が見せてくださったのが山上での出来事。

イエス様は3人の弟子ペテロとヤコブとヨハネを連れ高い山に登られた。神は時に聖なる経験を山の上で与えられる事がある。旧約の時代もアブラハムはモリヤの山で「主の山には備えがある」という経験をし、ホレブの山でモーセは十戒が与えられ、エリヤは神と出会う経験をした。神は人里離れた場所で人と出会い、大切な経験をお与えくださる。※証し

III. 天の御国の先取り（3-4）

御姿が変わったイエス様が着ておられた衣はこの世の職人にはとてもなし得ない程の白さであったとある。この白く輝く衣は、黙示録に「天の御国で大勢の群衆が、白い衣を身にまとい」とあり、その衣は「子羊の血（イエス様の十字架の血）で洗われ、白くされた衣」と記されている。普通は血で洗ったら真っ赤に染まってしまう。しかしここで言っている事は罪、汚れが全くない御子イエス様の十字架で流された血によって罪を洗い清められた者の御国での姿は、栄光に輝く白い衣（何の汚れ、罪による苦しみ、悲しみが全く無く、喜びと平安に満ちている姿）が与えられるという事。

滅んで当然であった私たちはただただ主の十字架の愛の恵みによって罪を赦され、いつの日か天においてこの栄光の衣を着ることが約束されている。なんとという恵み、希望！

実はここでイエス様が新しい姿に変化されたのではなく、天においての本来の聖なる栄光のお姿をお見せになられたという事。外的、表面的変化ではなく内なるご性質が外に現れた変化を意味している。

「キリストは、神の御姿であられるのに、神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、人間と同じようになられました。人としての姿をもって現れ、自らを低くして、死にまで、それも十字架の死にまで従われました。」（ピリピ 2:6-8）とあるように、イエス様は弱く罪深い私たちを救うために栄光のお姿を隠してしもべの姿をとり、人間と同じようになられた。

イエス様の御姿が「変わった」（2）のみことばと同じ原語「メタモーフォー（変わる、変容させる、造りかえる）」が並行記事のマタイ以外に聖書に2箇所だけあり、私たちが変えられる意味に繋がる。

①「この世と調子を合わせてはいけません。むしろ、心を新たにすることで、自分を変えていただきなさい。そうすれば、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に喜ばれ、完全であるのかを見分けるようになります。」（ローマ 12:2）ここでの「変えていただきなさい」は、私たちは主を信じた時から新生された骨格が与えられる。しかしこの世にあっては罪があるため、罪によってその新生された姿が隠されている。けれども罪を悔い改めて主の赦しによって罪が取り除かれ、その新生された姿（主の栄光の似姿）が現されていく。主にその姿へと変え続けて頂きなさいということ。

②「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」（II コリント 3:18）ここでは、はっきりと御霊なる主の働きによって、悔い改めに導かれて罪の覆いを取り除かれ「主と同じかたちに姿を変えられていく」事が記されている。

つまり主を信じて新しく造り変えられた私たちは外側から変えられるのではなく、内側に新しいイエス様の性質が与えられており、私たちが残っている罪を悔い改める度に内側の新しい性質が表に現さ

れる。それは御霊なる主の働きによって内側から引き出してくださるという事。

私たちは新しく造り変えられた者として、自分達の努力や頑張りではなく、御霊なる主により頼み悔い改めに導かれ、既に内側に与えられている主の似姿へと一步一步変えられてまいりましょう。

そしてそこにエリヤとモーセが現れイエス様と語り合っていた。2人がなぜここに現れ、何をイエス様と語り合っていたのか？「それはモーセとエリヤで、栄光のうちに現れ、イエスがエルサレムで遂げようとしておられる最期について、話していたのであった。」(ルカ 9:30-31)

人類を罪から贖う十字架の死の御業の事について話していた。このエリヤは旧約聖書の預言者の代表者で、モーセは律法の代表者。旧約聖書において人々が待ち望み、また旧約聖書を代表するモーセとエリヤも待ち望んでいた事が、遂にイエス・キリストの十字架によって、旧約の律法も預言も完全に成就されるのだという事が表されている。

また、このエリヤとモーセの姿から私たちは希望を見ることが出来る。これは新天新地においての光景を地上において先取りして見せている。主を信じる私たちには新天新地において2人のように栄光の復活のからだが用意されている事がここからはっきりと確信を持つ事ができる。

IV. 主の栄光の姿へと変えられる希望 (5-6)

この時の時刻は夜で山登りの疲れもあり、ペテロは眠くてたまらなかった。その中でイエス様の栄光に満ちた輝きの姿と偉大なエリヤとモーセという人物の姿の光景に圧倒されて恐怖に打たれ、とっさにペテロから出た言葉は的外れな言葉。何を言ったら良いか分からずに出た言葉。すると(7-8)。弟子達は前回の箇所、イエス様から「わたしはこれから苦しみに遭い、殺される」と言われた。それ故に弟子たちの心は不安で落ち込んでいた。そのような中で神の栄光を表す臨在の雲が彼らを覆い、雲から神の声がした。「これはわたしの愛する子。彼の言うことを聞け。」と。弟子達はこの神のおことばでイエス様こそ神の御子であると改めて確信を持つ事ができ、御子であるイエス様のおことばに聞き従って行けば良いのだと平安が与えられた。

これらの出来事を間近で見ていた人物は3人で、そのうちのペテロとヨハネが晩年に今回の出来事を背景とした記事を記し、彼らの後の生涯に影響を与えていることが分かる。ご聖霊がくだられるまでは彼らの霊的な理解は浅いのですが、晩年にはこの出来事が彼らに影響を与えている。

「私たちをご自身の栄光と栄誉によって召してくださった神を、私たちが知ったことにより、主イエスの、神としての御力は、いのちと敬虔をもたらすすべてのものを、私たちに与えました。その栄光と栄誉を通して、尊く大いなる約束が私たちに与えられています。それは、その約束によってあなたがたが、欲望がもたらすこの世の腐敗を免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。…… 私たちはあなたがたに、私たちの主イエス・キリストの力と来臨を知らせましたが、それは、巧みな作り話によったものではありません。私たちは、キリストの威光の目撃者として伝えたのです。この方が父なる神から誉れと栄光を受けられたとき、厳かな栄光の中から、このような御声がありました。『これはわたしの愛する子。わたしはこれを喜ぶ。』 私たちは聖なる山で主とともにいたので、天からかかったこの御声を自分で聞きました。」(II ペテロ 1:3-18) 一番のポイントは、主イエスを信じる者は「神のご性質にあずかる」ものとされるという事。偉大な人物ではあったが、同じ罪ある人間であったエリヤとモーセの栄光の姿を目撃したペテロは最後まで主イエスを信じ従うならば、主の栄光のご性質にあずかる者と変えて頂ける約束を持ち続け、迫害、苦難の生涯を全うした。主を信じて従っていく者にはその栄光の約束が与えられているという事。

「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。キリストにこの望みを置いている者はみな、キリストが清い方であるように、自分を清くします。」(I ヨハネ 3:2-3) ヨハネはペテロとは言い方を変え、主を信じ従う者は「キリストに似た者になる」という約束があると記している。

ペテロもヨハネもあの山上での素晴らしい経験を忘れることなく、その時にはイエス様、またエリヤとモーセの栄光の姿を見ていただけでしたが、いつか栄光のイエス様にお会いし、そして自らも栄光の主の似姿のからだを頂く事ができるという約束を握り、最後まで主を信じ従った。私たちもこの素晴らしい約束を握って互いに愛し励まし合いこの素晴らしい福音を宣べ伝え歩んでまいりましょう。